

出題分析		
試験時間 120 分/2 科目	配点 100 点	大問数 3 題
分量 (昨年比較) [減少 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">同程度</span> 増加]	難易度変化 (昨年比較) [易化 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">同程度</span> 難化]	
<p><b>【概評】</b></p> <p>大問数は昨年と同じⅠ～Ⅲの3問だった。Ⅰ4. (1) (ii)、5. (1) (ii)、(2)、Ⅱ1. (5)、3.、4.、Ⅲ3.、4. の計8題の論述説明問題や計算過程の記述に多くの時間が取られたであろう。Ⅲでは、最近定着した実験を題材とする思考問題が出題された。多くの問題は標準レベル程度であるが、答案作成の煩雑さを考えると時間内の完答は難しい。一方、空所補充や反応式を書かせるだけといった平易な出題を確実に処理した後、上述の設問をどこまでさばけたかで勝負が決まったであろう。答案作成の手際の良さで合否が決まると考えられる出題だったので、普段から計算や思考過程の説明を記す練習をしていた受験生は有利だったであろう。</p>		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	芳香族化合物の構造決定と分離、分析	1. (4)は手拍子で3つの異性体をすべて書いてしまわないよう注意を要した。3. では B の分子量は不明だが、F、D から答えが定まる。5. (1) (ii) と (2) の論述説明で差がつくだろう。論述 3 題、反応式 3 題、構造式 2 題、記述 7 題	やや難
II	イオン交換膜法、アンモニアの性質と反応	1. (5) の論述説明は普段意識しない点が問われ難しい。2. の計算や 3.、4. の説明論述も難易度的には無理がなく、ここを手早く解答できたかが合否のポイントとなるであろう。論述 3 題、反応式 2 題、計算 1 題、記述 1 題、選択 1 題	標準
III	窒素化合物の反応と実験装置	見慣れない実験装置の原理の理解が問われた。3. は空気の 1/5 という点から予想がつく。4. は、情報が足りておらず、解答は極めて困難である。5. は反応式の整理の仕方が問われた。空所補充 1 題、論述 2 題、反応式 1 題、選択 1 題、計算 1 題	やや難

**合格のための学習法**

典型問題の演習に留まらず、種々の設定の入試問題にアタックし、対処できる問題の幅を広げたい。同時に、実験や課題研究を通して教科書記載事項に関する理解を深め、実験操作やその意味についても理解を深めておこう。いたずらに難問ばかりを解くよりもむしろ、根本的な物事の考え方、現象の仕組みを理解することによって、新奇な設定に対処できるようにしておこう。また、科学的な文章もたくさん読み、問題文から設定をすばやく理解する力もつけておきたい。